

宗教学で中東情勢分析

同大・小原教授
大本で講演 イスラム型民主化言及

リビア空爆など緊迫する中東情勢を、宗教学の立場から検討する講演会が、このほど亀岡市内であった。同志社大の小原克博教授が「負のイメージで語られる『イスラム原理主義』でも多様な意味を持つ。紛争の平和的解決を目指すにはレッテルを張らず、さまざまな価値を認めていくことが必要」と訴えた。

NPO法人の大本イ
スラエル・パレスチナ
平和研究所（亀岡市）
が主催した。

冒頭、一連の「ジャ
スミン革命」の特徴を

▽短期間での情勢激変
▽今後情勢変化の可能性が高い▽「フェースブック」などの情報伝達手段で、近隣諸国の矛盾を互いに即座に共有できるようになった」と指摘した。

そのうえで、新しい秩序を求めたり、犠牲者を悼む気持ちで人々が広場に集まったと説明。「人々が実際に肩と肩を触れあわせる身体的な感覚が大きな変化に直結した。ツイッ

ターなど情報伝達だけが生んだ革命でない」と背景を解説した。

イスラム教はマホメットが商人だったこともあって現実的な視点を持つといい、「ムスリム同胞団も世直しを目指している。単なる過激な集団と見なさずイスラム型民主化の可能性を考える必要がある」と述べた。

日本の将来とのかかわりでは「外国人の力なしに経済力維持は無理。ブラジル、インドネシアの人たちを単なる労働力とみるか、さまざまな宗教的な価値を尊重できるかで日本の成熟度が図られる」と宗教学の立場から提言した。



中東情勢について、宗教学の立場から講演する同志社大の小原克博教授（亀岡市荒塚町・大本会館）